

ダブル赤ずきんとスローライフ♪

ゝ 昼は狩人、夜は二人の抱き枕ゝ

2021/03

同人音声サークル『ウラオモテ』

とある村。小屋のリビング。

窓からは木々の囁きや、小鳥のさえずりが聞こえる。

主人公の前に契約書が差し出される。

《エ◇正面/30cm》

エミリアー 「それでは、ニこと、ここにサインを」

導かれるままにサインを書いていく。

エミリアニ 「あと、こちらにも」

奥のキッチンからクレットが歩いてくる。

両手にはホットココア。熱そう。

《ク◆右前/100cm から 右前/30cm へ動きながら》

クレットニ 「あーちちちちち……」

《ク◆右前/30cm》

クレットニ 「はい、クレットお姉さん特製ホットココア♪ マ

シュマロ入り♪ どーぞ♪」

クレット、ココアをテーブルに置く。

クレットニ 「温かいうちに飲んでね」

エミリアニ 「ありがとう」

クレット、主人公の隣に座る。

《ク◆右/30cm》

クレット 7 「（座る）ふう〜……で、彼が例の？」

エミリア 8 「うん。村で一番の狩人さん」

クレット 9 「ふーん♪」

しばしサインを書く。

クレット、興味津々に顔をじろじろ見る。

《ク◆右/10cm》顔を見回す感じで動く《

クレット 10 「んー……ん〜……ふふ♪ なるほどお……♪」

主人公、思わずサインを書く手が止まる。

エミリア 11 「近いよ?」

《ク◆右/30cm 戻る》

クレット 12 「あーごめんごめん♪ つい♪ ふふ♪」

エミリア 13 「もう」

クレット 14 「やーでも助かるよお。最近この森で狼が出たって言うじゃん? アタシは大丈夫でも、エミリアが怖がっちゃうからさ〜」

エミリア 15 「怖くないです〜」

クレット 16 「心配してあげてんの〜」

エミリア 17 「心配なんていらないし〜」

クレット 18 「え〜?」

エミリア 19 「え〜」

エミリア、強がる。

(早口ぎみ)

エミリア 20 「ていうか別に、狼なんて怖くないから……怖くないからねっ？ でも、いるかいなかったら、いないほうがいいに決まってるじゃん。だから彼を雇って、それで何とかして——」

クレット 21 「うふふ♪」

エミリア 22 「何っ」

《ク◆右/10cm》 (小声)

クレット 23 「アタシの妹、可愛いでしょ♪」

エミリア 24 「なっ！ もうあっち行つて！」

《ク◆右/30cm 戻る》

クレット 25 「えーやだあ」

エミリア 26 「じゃあ変なこと言わないで」

クレット 27 「はーい♪」

エミリア 28 「まったく……ああ、サイン書き終わってましたか。すみません」

エミリア 29 「それでは契約のとおり、今日から私たちの護衛をお願いします。狼を見つけたら、処分してもらって構いません。いいですか？」

クレット 30 「よし、契約成立だね♪」

《ク◆右/10c≡抱きつく》

クレット 31

「君には期待してるぞー？ うりうりー♪」

エミリア 32

「だから近いって！」

クレット 33

「いいじゃんいいじゃん♪ もうサインしちゃったんだしさ〜♪」

クレット 34

「今日から君は、アタシ達専属の狩人だよ？」

《ク◆右/0c≡近づく》

（『ボス』はネイティブっぽくねっとりと小声）

クレット 35

「そう、アタシが……ボス」

エミリア 36

「雇い主でいいじゃん」

（大きく息を吸って、もう一回）

クレット 37

「……ボス」

エミリア 38

「怖がってるよ?」

《ク◆右/10c≡戻る》

クレット 39

「オウフ、そんなつもりじゃなかったんだけど……ほら、アタシ達はファミリーだよファミリー。これから同じ屋根の下で暮らす家族なんだから♪」

クレット、主人公の肩をほぐす。

クレット 40

「ほら、肩の力抜いて〜？ お姉さん怖くないよ〜？ アットホームだよ〜？」

クレット 41

「大丈夫？ 今日から頑張れそ?」

クレット 42

「ん♪ じゃあ頑張ろう♪ えへへ」

エミリア、二人を横目に見ながらココアを一口。

エミリア 43

「ふー、ふー……んく、んく……はあ」

《ク◆右前/10cm、横から顔を覗く感じ》

クレット 44 「ああ、アタシのことは気軽に、クレットって呼んで♪。」

クレット 45 「うん♪ よろしく♪。」

《ク◆右/10cm》

クレット 46 「で、彼女がエミリア♪ 超可愛いよね♪。」

エミリア、飲んでいたココアがむせる。

エミリア 47 「ぶふっ……んっ、可愛くないって」

クレット 48 「うえへー、照れちゃってー」

エミリア 49 「あーもう、お姉さんのことは無視してください。……その、今日からよろしくお願いします」

クレット 50 「アタシからもよろしく♪ 家のことはエミリアに任せてるから、なんかあったら彼女に」

主人公、返事をする。

クレット 51 「ん♪。」

《ク◆右/30cm》

クレット 52 「じゃ、アタシは仕事だから。後はお願いね」

エミリア 53 「はーい」

クレット、立ち上がって準備。

ナイフホルダーを手に取り、太ももに付ける。

《ク◆右前/50cm『ナイフはーっと』のところで探して見回す》

クレット 54 「メガネよし、ズキンよし……ナイフはーっと……あったった……よし」

クレット 55 「いつてきまーす♪」

《エ◇正面/30cm クレットのいる右奥を見ながら》

エミリア 56 「狼には着いていかないでねー!」

《ク◆右前/50cm マイクと反対を向きながら》

クレット 57 「あー善処するー!」

クレット、急いで外へ。

しばし間。一呼吸。

《エ◇正面/30cm マイクのほうを向く》

エミリア 58 「ふう……」

目線が合う二人。自然と微笑む。

エミリア 59 「ふふ。色々すみません。いつもあんな感じなんです。距離が近いというか……警戒しないというか……」

エミリア、ココアを手にとってぽつり。

エミリア 60 「……心配なのは私のほうですよ」

ふーっと冷ましてからココアを一口。

エミリア 61 「ふー、ふー……ん、んく……はあ」

エミリア 62 「ココア美味しいですよ? 飲んでみてください」

主人公もココアを一口。

エミリア 63 「ふー……んく、んく……ほっ」

エミリア 64 「でも、本当に助かります。前から狩人は募集していたんですけど、誰も来てくれなくて」

僕が初めてなんですか……？

エミリア 65 「はい、あなたが初めてです。いきなり来たんで、さっきはビックリしました」

エミリア 66 「玄関をノックされて、朝早くから誰だろうって、慌てて開けたら……猟銃を背負った男が立ってるんですもん」

エミリア 67 「正直、少しだけ怖かったです」

エミリア 68 「ああいえ、謝らないでください。怖い人じゃないっていうのは、すぐに分かりましたから」

エミリア 69 「むしろ……ふふ♪ 一つだけ忠告しておきます。お姉さんに嫌なことをされたら、ちゃんと嫌って言うってください。じゃないと、ずーっと構ってくるんで」

エミリア、ココアを一口。

エミリア 70 「ええ。ずーと……ふー……んく、んく……はあ」

エミリア 71 「気を付けてくださいね？」

……はいっ。

エミリア 72 「ふふ。あまり長話もいけませんね。契約も済みまし
たし、早速、見回りのほうお願い出来ますか？」

エミリア 73 「はい。改めて、今日からよろしくお願いしますね。
狩人さん」

(01-END)

(クレット 580文字) (エミリア 830文字)

狩人、赤ずきんの家の前で護衛中。

外はすっきり夜。ちよっぴり肌寒い。

家から赤ずきんの二人が差し入れを持ってくる。

《ク◆右前/50cm から 右前/30cm へ動きながら》

クレット 74 「お疲れー♪」

《ク◆右前/30cm》

クレット 75 「はい♪ クレットお姉さん特製ホットミルク♪ ハ
チミツ入り♪ どーぞ♪」

《エ◇左前/30cm》

エミリア 76 「外寒いですよね。毛布、持ってきました。使ってく
ださい」

狩人、毛布にくるまる。

クレット 77 「ねえねえ、アタシ達も入ろうよ」

エミリア 78 「ええ、ダメだよ」

クレット 79 「いいの♪ くっついてたほうが温まるでしょ?」

赤ずきんの二人、毛布に入る。

《ク◆右前/10cm》

クレット 80 「ん……ほら、エミリアもくっちきて」

《エ◇左前/10cm》

エミリア 81 「ん……んん……はあ、はあ」

クレット 82 「君は猟銃置いて……休憩だよ休憩♪」

毛布に入り、温かそう。

クレット 83 「ん……ふう」

《エ◇左/0cm 小声》

エミリア 84 「嫌なら嫌って言うてくださいね」

クレット 85 「なんか言ったー？」

《エ◇左前/10cm》

エミリア 86 「なんにも」

クレット 87 「そっ」

クレット 88 「まあほら、君もエミリアも、ホットミルク飲んで温まって♪ ささ、召し上がれ♪」

エミリアと狩人、ホットミルクを一口。

エミリア 89 「ふー、ふー……ん、んく……ほっ」

クレット 90 「ん、美味し？ 良かった♪」

クレット 91 「で、調子はどう？ バンバンやってる？ 何匹か仕留めた感じ？ ん♪ いいねえ♪」

エミリア 92 「夜遅くまでありがとうございます。あなたのおかげで、私たちも安心して眠れるので」

クレット 93 「ほーんと♪ ありがとね♪」

クレット 94 「君が護衛に集中出来るように、アタシ達もこうやってサポートするからさ、してほしいことがあったら、なんでも言ってね？」

クレット 95 「ん♪ なんでも♪」

クレット 96 「そばにいてほしいって言うなら、ずっとくっついてあげるし」

《ク◆右/0cm 近づいて小声》

クレット 97 「もったいいこと、してあげてもいいよ?」

エミリア 98 「ちょっとお姉さん」

《ク◆右前/10cm》

クレット 99 「ん?」

「あんまり、その……くっつき過ぎるのは良くないと思うよ? 彼も窮屈そうだし」

クレット 101 「えー? そういうエミリアだって、ぎゅーって抱きついてるじゃん」

エミリア 102 「ぎゅーじゃないよ! ちょっと腕掴んでるだけっ」

クレット 103 「怖いんだー♪」

エミリア 104 「怖くないって! でも、いつ狼が出るか……」

クレット 105 「んーまだ村だって明かりがついてるし、大丈夫でしょ。ね?」

エミリア 106 「まあ」

クレット 107 「それよりさ、もっと温めてあげよ?」

クレット 108 「ほら、手がかじかんじやってる。アタシは右手を温めるから、エミリアは左手温めて?」

エミリア 109 「分かった……じゃあ、その……」

《エ◇左/0cm 二二から小声》

エミリア 110 「手繋ぎましようか」

《ク◆右/Occyニニから小声》

クレットニ
「右手は、こーこ♪」

クレットニ2
「どう？ 太ももの間♪ 温かいでしょ♪」

主人公の手が股にこすれる。

クレットニ3
「あ、ちよつと♪ んっ♪ あんまり手動かしちやダメ♪ はあ♪ あそこ、こすれる♪ んっ♪ はあ、はあ♪」

エミリアニ4
「ん？ ちよつと鼓動が早くなったような。どうかされました？」

クレットニ5
「温かくなってる証拠♪ 二人でもっと、密着してあげよう？」

エミリアニ6
「ん、じゃあ、腕を抱きしめて……はあ、もつと温めますね……ん、んん……はあ」

(BGV。ゆっくり温かい吐息を20秒)

クレットニ7
「はあ……はあ……(★20秒)」

エミリアニ8
「はあ……はあ……(★20秒)」

クレットニ9
「なんだか、いやらしいね♪」

クレットニ20
「外から見たら、三人で毛布にくるまって、温めあつてるようにしか見えないけど……」

クレットニ21
「毛布の中は、二人のお姉さんに左右から密着されて……胸も太ももも押し付けられて……体が火照ってきちゃう♪」

クレットニ22
「なるほどねえ♪ 毛布の中で何が起こつても、外には見えないわけだ♪」

クレット 123 「ふっふっふ♪ いいこと思いついちゃったあ♪」

《ク◆少し前を覗き込む》

クレット 124 「ねえエミリア、ちよっと手貸して?」

エミリア 125 「ん、何?」

クレット、エミリアと一緒に主人公の股間を触る。

《ク◆右/003 戻る》

エミリア 126 「ん、ん? 硬い」

クレット 127 「もっとさすってみて? すり、すりって♪」

しばしさする。

クレット 128 「はあ……ふふ……はあ、はあ♪」

エミリア 129 「はあ……ん、はあ……う、はあ……」

エミリア 130 「や、これって、まさか」

エミリア、毛布の中を見る。

エミリア 131 「ちよっと失礼します……あ」

クレット 132 「うふふ♪」

クレット 133 「あーあ、大きくなっちゃったあ♪」

《エ◇少し前を覗き込む》

エミリア 134 「お姉さんのせいじゃんっ。もう」

クレット 135 「あはは♪ でもさー、これ、なんとかしないと、護衛に集中出来ないよねえ♪ アタシ達が、なんとか、するしかないよねえ」

エミリア 136 「なんとか……でもダメだよ。ここ外だし」

《ク◆少し前を覗き込む》

クレット 137 「毛布で隠れてるから大丈夫♪」

エミリア 138 「ほんと?」

クレット 139 「ほんとほんと♪」

《ク◆右/Oc ゆっくり戻る》

クレット 140 「まあ? あんまり気持ちよさそーな顔したり、エツチな声を出したりしたら……」

(ニニは囁き)

クレット 141 「周りの人にバレちゃうかもね」

エミリア 142 「お姉さんがそういうこと、したいだけなんじゃ……」

《ク◆少し前を覗き込む》

クレット 143 「バレた? あはは♪」

エミリア 144 「もうっ」

《エ◇左/Oc 戻る》

エミリア 145 「あなたも……『嫌なら嫌って言ってください』って、あれほど言ったのに……」

(ニニは囁き)

エミリア 146 「嫌じゃないんですね……えっち」

エミリア 147 「もう知らないです。気持ちよくなればいいんじゃないんですか」

《ク◆右/Oc 》

クレット 148 「ふふ♪ そう来なくっちゃ♪」

《ク◆右/000 若干下を見る》

クレット 149 「それじゃ、チャックを開けて……おちんちんだけ外に出すね？ ん……んしょ……♪」

脱がされる。

《ク◆右/000 マイクに向く》

クレット 150 「あは♪ 硬あい♪ 期待してたんだー♪ んふふ♪」

エミリア 151 「ん……先っぽがちよつと湿ってます」

クレット 152 「そのまま触ってて？ 先っぽ、なでなでって♪」

エミリア 153 「ん、なでなで……はあ、なでなで……」

クレット 154 「アタシは、竿の部分を、指先でくすぐってあげる♪」

クレット 155 「「に」しょ「しよ……」しよ「しよ「しよ……」♪」

クレット 156 「どう？ アタシ達の指の動き、分かる？」

エミリア 157 「毛布の中でどう触られてるか、感触だけで想像してみてください」

男性器に二人の手が絡みつく。

クレット 158 「「に」しょ、に「しよ……」しよ、に「しよ」

エミリア 159 「っん、っん……っん、っん」

クレット 160 「すり、すり……すり、すり」

エミリア 161 「つつうー……かり、かり」

クレット 162 「「に」に「に」……「に」に「に」に「に」」

エミリア 163 「なで、なで……なで、なで」

クレット 164 「ちゅこ、ちゅこ……ちゅこ、ちゅこ」

エミリア 165 「触れるたびにおちんちんが跳ねてます♪」

エミリア 166 「お声を我慢していても、おちんちは正直に反応してくれそうですね♪ 可愛い♪」

クレット 167 「声は我慢だからね？ おちんちんちゅこちゅこーってされても、がーまーん♪ 分かった？ ふふ♪」

クレット 168 「ちゅこ、ちゅこ……ちゅこ、ちゅこ」

エミリア 169 「なで、なで……なで、なで」

クレット 170 「しこ、しこ、しこ、しこ」

エミリア 171 「しーこ、しーこ、しーこ」

クレット 172 「しこしこしこしこしこしこしこしこしこし♪」

エミリア 173 「なーで、なーで♪」

エミリア 174 「ふふ♪ とろけたお顔になってますよ？」

エミリア 175 「普段は勇敢で、かつこい表情を見せてくれるのに……おちんちんを可愛がられると、こんなにか弱い表情になるんですね」

クレット 176 「獰猛な狼をバンバンなぎ倒す、つよいお兄さんなのに……おちんちんよしよしされたら、甘えん坊になっちゃった♪」

クレット 177 「でも、いいんだよ？ それで」

クレット 178 「今の君は、別にかっこよくなくていいの」

エミリア 179 「私たちのことを、守ってくれたご褒美ですから♪
今だけは仕事を忘れて、気持ちよくなってください
い♪」

二人、わざと温かい吐息を主人公に当てる。

クレット 180 「はぁー♪ はぁー♪ 冷たくなったお耳も、吐息で
温めようね♪」

(BGV。より濃厚な吐息を30秒)

クレット 181 「はぁー♪ はぁー♪ (★30秒)」

エミリア 182 「はぁー♪ はぁー♪ (★30秒)」

しばし手コキ。

エミリア 183 「おちんちん、どんどん濡れています♪ ちゃんと気持ち
よくなってるんですね♪ 嬉しいです♪」

クレット 184 「息も荒くなってる♪ でも、声は我慢だぞ♪」

クレット 185 「ほら、あそこ……通りすがりのお姉さんが、こっち
見てる」

エミリア 186 「あの人は……向かいに住む占い師さんですね。少し
怪しまれているような気が」

クレット 187 「まあ、手は止めないけどねー♪ しこしこしこしこ
しこ♪ しこしこしこしこしこしこ♪ ああバレちゃ
うバレちゃう♪ でも気持ちいい♪」

エミリア 188	「お姉さん意地悪ー。バレても知らないよー?」
クレット 189	「そついうエミリアだって、一緒にしこしこしてるじゃん♪」
エミリア 190	「ふふ♪ だって、こんなに可愛い反応されたら、責めないほうが失礼だよ♪」
エミリア 191	「ごめんなさい狩人さん♪ でも、あなたが悪いんですよ? 甘えん坊ミルク搾り、もつとしちやいますからね♪」
クレット 192	「くす♪ おちんちんぷくーって膨らんで、『全部搾ってー♪』って言ってるみたい♪ いいよー?」
	ぴゅっぴゅーってスッキリしようねー♪」
クレット 193	「エミリアと手を繋いでー、おててまんこでミルク搾り♪」
エミリア 194	「はあ♪ 気持ちよさそう♪ 手のひらでおちんちん押しつぶされながら、しこしこ♪ 気持ちいいですかー?」
クレット 195	「頭の中とろとろになっちゃおうねー♪」
	リズムカルな手コキ。温かい吐息。
	(B G V。少し早い吐息、30秒)
クレット 196	「はあ、はあ♪ (★30秒)」
エミリア 197	「はあ、はあ♪ (★30秒)」

クレット198 「ふふ♪ 足腰がつくがく♪ 立っているだけでも精
いっぱいって感じ♪ 倒れそうになっても大丈夫だ
よ？ 二人で支えてるからさ」

エミリア199 「でも、さすがにここまで激しいと、汗だくになって
しまいますね。毛布の中もいやらしい匂いが充満して
います♪」

クレット200 「アタシ達の汗の匂いも、君のおちんちんの匂いも、
ぐっちゃぐちゃ♪ この匂い嗅ぐと、すー、はあ♪
頭ふわふわする♪」

エミリア201 「すー、はあ♪ ん、はあ♪ 危険な匂いです♪
はあ、はあ♪ おちんちん、もうどろどろです
よお♪」

(30秒、『くんくん』『すー、はあ』と夢中で
匂いを嗅ぎながら吐息を当てるアドリブ)

クレット202 「すー、はあ♪ あ、はあ♪ (★30秒)」

エミリア203 「すー、はあ♪ ん、はあ♪ (★30秒)」

エミリア204 「あそこのお姉さん、まだこっちを見てます。ふふ♪
毛布の中で、こんなにえっちな事してるなんて、想
像もしませんよねー」

クレット205 「あくまでアタシ達は、一緒に毛布にくるまって、温
め合ってるだけ♪ えっちな匂いが漏れたり、我慢汁
がぼたぼた落ちたりしてるかもだけど、大丈夫大丈
夫♪」

(「」は囁き)

クレット 206 「中で起こってることは、アタシ達だけの秘密♪」

エミリア 207 「はあ、興奮しますね♪ 表では、ちよつとイチャイチャしてるくらいにしか見えないと思います」

(「」は囁き)

エミリア 208 「でも、毛布の中では、二人のお姉さんにおちんちんを滅茶苦茶にされてるんです♪」

クレット 209 「いけない事のはずなのに、おちんちん元気になっちゃうねー♪」

クレット 210 「こっというのが好きならさ、毎日してあげてもいいよ〜」

クレット 211 「頑張った君への褒美♪ 一日の仕事終わりに、アタシ達がおちんちんをスッキリさせるの♪」

エミリア 212 「さすがに毎日外でするのは危険ですから……今度からは、時間になったら私たちの寝室に来てください」

エミリア 213 「同じベッドで、一緒に寝ましょう？ 歓迎しますよ〜」

クレット 214 「えへへ♪ 誘われちゃったねー♪ 毎日の楽しみが増えたじゃん♪」

クレット 215 「ねえねえ、ベッドの上でどんなことされちゃうんだろっねー」

(「」は囁き)

クレット 216 「どんなこと、してほしい？」

エミリア 217 「今日よりも激しいこと、してみたいですか？」

(「」は囁き)

エミリア 218 「例えば、おまんこ、とか」

クレット 219 「したいの？ どうしよっかなー♪」

エミリア 220 「まあ、努力次第では、考えなくもないです。その代わり、毎日のお仕事、頑張っていたいただけますか？」

クレット 221 「ふふ♪ アタシ達のこと、ちゃんと守ってね？ そしたら……」

(「」は囁き)

クレット 222 「おまんこ、してあげてもいいよ？」

エミリア 223 「ふふ♪ おちんちん、もっと硬くなりました♪ お返事のつもりですか？ 変態♪」

クレット 224 「あは♪ すごい硬あい♪」

クレット 225 「さっきから、おちんちんが太ももに当たってるよ？ पेचिっपेचिって♪ やらしーんだあ♪」

クレット 226 「君ってもしかして、太もも好きだったりする？」

エミリア 227 「そういえば、普段お話している時も、視線が下にいきがちなんですよねえ」

エミリア 228 「ふふ♪ 赤いミニスカートをめくるとー、ほら♪ 白くて、柔らかあい太ももです♪ これが見たかったんですよね？」

クレット 229 「でもでもお、見るだけでいいのー？ 目の前の太ももに、牛さんミルクどぴゅどぴゅーってしたら、絶対気持ちいいと思うなー♪」

クレット 230 「ねえねえ、やってみたくない？」

エミリア 231 「おちんちんミルク、ぶっかけたいんですか？　しょうがないですねえ」

エミリア 232 「たっぷり我慢した後なので、どれくらいぶっかけられちゃうんでしょうか♪」

クレット 233 「楽しみだねー♪」

エミリア 234 「ねー♪」

クレット 235 「あ、ミルクのぼってきた？　太ももぴゅっぴゅ、準備出来ちゃった？」

エミリア 236 「いいですよ？　私たちも、スカートをめくったまま、あなたにぶっかけられるの、待ってますね♪」

クレット 237 「あつつういのいっぱい出して、太ももにマーキングして♪」

エミリア 238 「毛布の中で、どろどろお射精、こっそりしちゃいましょうね♪」

激しい手コキ。

(20秒、喘ぎ混じりの吐息アドリブ。だんだん激しく)

クレット 239 「はあ、はあ♪　ん、はあ、はあ♪　あ、はあ♪

(★20秒)」

エミリア 240 「はあ、はあ♪　うう、はあ、はあ♪　ん、はあ♪
(★20秒)」

クレット 241 「ん、出して、出して。」

エミリア 242 「出してくだち。」

耳元で甘い射精サポート。

クレット 243 「はい、どぴゅ、どぴゅ、どぴゅー、びゅく、びゅく、びゅる、びゅるるっ、びゅっ、びゅっ、びゅるー、びゅる、びゅる、びゅるるっ。」

エミリア 244 「はい、ぴゅっぴゅっぴゅ、ぴゅー、ぴゅる、ぴゅる、ぴゅるる、どぶっ、どぶっ、ぴゅー、ぴゅー、びゅー、びゅく、びゅく、びゅるる。」

クレット 245 「どぴゅううー……。」

エミリア 246 「どぴゅううー……。」

クレット 247 「ふふ、太ももぐっちゃぐちゃ、毛布の中大変だよ。」

エミリア 248 「私たちの手で、こんなに気持ちよくなってくれたんですね、ありがとうございます。」

《ク◆右/10cm 小声こゝまど》

クレット 249 「あーでも……ありやバレてるね」

クレット 250 「あそこの占い師のお姉さん、めっちゃそわそわしてる。」

《エ◇左/10cm 小声こゝまど》

エミリア 251 「まあ、言ってくるめればどうとでも」

クレット 252 「こわ」

エミリア 253	「それより、早く帰りましょう。もう夜遅いですし」
	《ク◆『家帰ってー』で近づいて、『一緒に体洗
	お?』で囁きで》
クレット 254	「そだねー。家帰ってー……一緒に体洗お?」
エミリア 255	「お姉さん、またえっちな事考えてない?」
	《ク◆右/10cm》
クレット 256	「えゝゝ、考えてないよおゝ」
エミリア 257	「もう……ゝ」
(02-END)	
(クレット 2398文字 130秒)	(エミリア 1888文字 130秒)
(ALL-END)	
(クレット 2978文字 130秒)	(エミリア 2718文字 130秒)